第4章　まとめ

今回の発掘調査は，府中市立第五学童クラブ分館建設に伴い実施されたもので，府中市内における 1934 次目の調査にあたる。

調査の結果，旧石器時代については，Ⅵ層（ハードローム層・武蔵野Ⅳ層）から石核１点，剥片６点が出土，縄文時代については，竪穴建物跡１棟（Ｌ 55 －ＳＩ 23）が検出された。また，中世以降については，土坑９基（Ｌ 55 －ＳＫ 125 ～ 133），溝１条（Ｌ 55 －ＳＤ 25），その他の遺構７基（Ｌ 55 －ＳＸ 66 ～ 72），小穴 80 基が検出された。古代の遺構は発見されなかったが，土師器・須恵器片の出土は認められた。

以下に各時代のまとめを記す。

旧石器時代

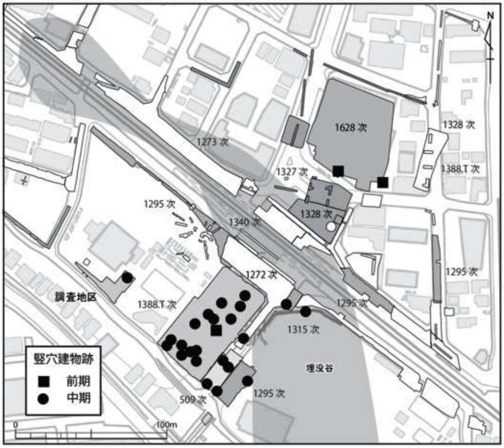
当該地周辺では，武蔵野台地縁辺という立地から想定されるとおり，既往調査でも遺跡の分布が認められているが，石器ブロックや礫群などの遺構は検出されておらず，Ⅵ層～Ⅶ層上層からの石器単体の出土が確認されているにとどまる。本調査地点についても，小規模なトレンチ調査ではあるが，既往調査同様に，Ⅵ層から単独の石器（石核１点，剥片６点）の出土が確認された。調査区南部は今後計画されている工事掘削が及ばないため，トレンチ調査は実施しておらず，調査区外の周辺も含め，当該期の生活痕跡が広がっている可能性がある。

縄文時代

今回確認された竪穴建物跡（Ｌ 55 －ＳＩ 23）は，本宿町遺跡で確認されている竪穴建物跡のまとまり（1388. T 次調査ほか）より約 600 m 西に位置しており，既知の範囲より集落がさらに西方に広がることを確認した（第 10 図）。本調査地点と 1388. T 次調査の間は未調査で，一連の集落を構成する竪穴建物跡等の遺構が内在している可能性が高い。

本宿町遺跡は，前期末葉から中期前半の集落で，今回の調査も含め，これまで竪穴建物跡 27 棟（前期末３・中期前半 24）が確認されている。今回発見された竪穴建物跡は，後世の削平でほとんど平面プランを確認できない状況であったが，炉内出土土器（阿玉台式）や，柱穴等出土土器（五領ヶ台式，勝坂式）から中期初頭から前半の所産と考えられ，既知の本宿町遺跡の年代と齟齬はない。

炉跡は南東部が攪乱されており，炉石が完形で遺存していたのは北西辺のみである。ただし，北東側，南西側も，炉石を切断する形で壊されているため，切断された炉石も原位置を保ってコの字状に残存しており，方形の石囲炉であることが分かる。完形で遺存している北西辺の炉石は長辺 45cm を測る大型の石を使用しており，切断された炉石についても大型の石を使用していたものとみられる。本宿町遺跡では，これまで中期前半の竪穴建物跡３棟で同様の石囲炉が検出されている（1388. T 次調査Ｌ 55 －ＳＩ 14，509 次調査Ｌ 55 －ＳＩ２，Ｌ 55 －ＳＩ３）。いずれも１辺は遺存していないが，コの字状に３辺の炉石，

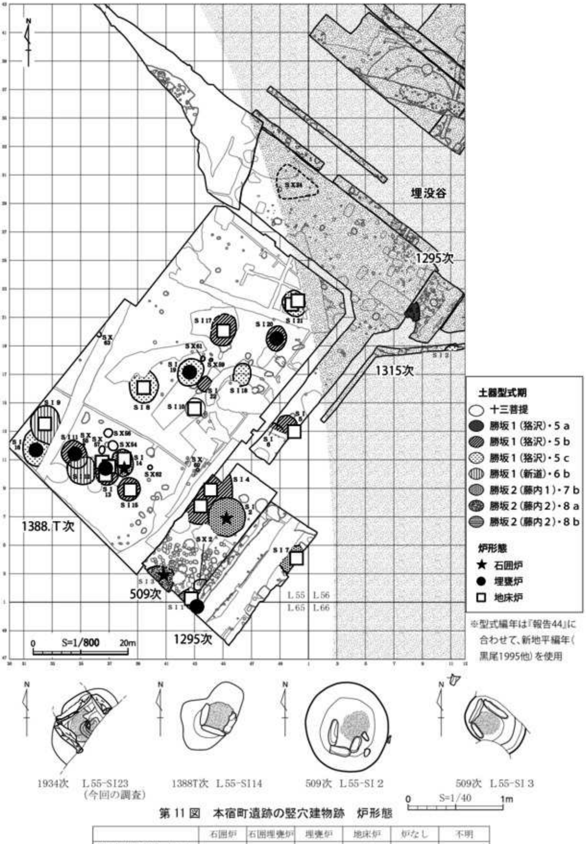


第10図　本宿町遺跡の竪穴建物跡分布図（1/2,500）

もしくは石を据えた痕跡が確認されており，同様に方形の石囲炉であることが分かる（第8図）。本宿町遺跡における炉形態は，前期末葉（竪穴3，炉4）の全てが地床炉，中期前半（竪穴24，炉25）では，石囲炉4，埋甕炉6，地床炉15，炉なし2，不明4であり，地床炉が約半分を占め，石囲炉は16パーセント程度となり比率は高くない（第7表）。ただし，炉の周囲に礫片が散在しているものもあり，地床炉のうち2基は石囲炉，埋甕炉のうち2基は石囲埋甕炉の可能性がある。詳細な時期別変遷は整理できていないが，地床炉は前期末葉から中期前半の各時期に存在する傾向にあり，埋甕炉は勝坂（狢沢～新道）期，石囲炉は勝坂（藤内1～2）期に集中しているようにみられる。数が少なく，単純に埋甕炉から石囲炉への変遷と捉えることには慎重になるべきだが，大まかな流れを反映している可能性はある。

古代

遺構は確認されず，表土や二次的混入として若干の遺物片を認めたのみである。国府域の集落からは一定の距離を隔てており，既往調査でも当該期の遺構・遺物は希薄である。古墳時代後期には御嶽塚古墳群が分布し，飛鳥時代には国指定史跡武蔵府中熊野神社古墳が築かれた後，墓域という認識が受け継がれていたのか，古代においても目立つ遺構は土坑墓の可能性を指摘される土坑のみで，居住地としての土地利用の痕跡は発見されていない。ただし，周辺の調査では特に御嶽塚付近で，少量ではあるが遺物の出土があることか

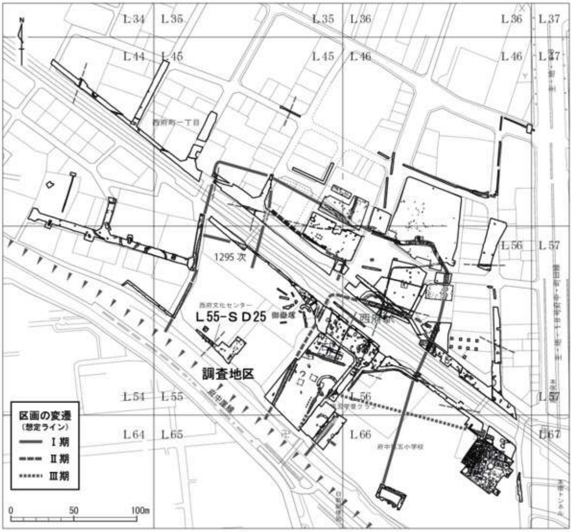


第11図　本宿町遺跡の竪穴建物跡　炉形態

	石囲炉	石囲埋甕炉	埋甕炉	地床炉	炉なし	不明
前期末（竪穴3・炉4）				4		
中期前（竪立24・炉25）	4（6）	（2）	6（4）	15（13）	2	4

（　）は礫が散在している炉で石囲炉と推定されたものを含む数字

第7表　本宿町遺跡における炉形態　集計表



第 12 図　調査地区周辺の中世区画溝想定図（1/3,000）

ら，何らかの人的活動は行われていたものとみられる。

中世

中世以降に関しては，覆土観察による年代推定が難しく，混入品を除く出土遺物が少ないため，中世に比定できる可能性の高い遺構は，L 55 － S D 25 のみである。当該溝からは古瀬戸壺底部が出土している。ピットについては掘立建物跡等の並びは見いだせなかったが，礎盤石が据えられたものもあり（P 16-103），削平された部分や，本調査区外も含めると掘立柱建物跡を構成する可能性がある。当地周辺は複数時期（12 ～ 17 世紀）にわたる大規模な区画溝がめぐることから、在地有力者の居館等の存在が指摘されており，本調査地区もⅠ期（12 ～ 14 世紀前葉）の区画溝内部に位置している（第 12 図)。北側のⅠ区の溝からは，底面幅 2.8 mの溝がさらに区画を分ける形で今回の調査区方向に延びているが，該当する溝の延伸部分は確認されなかった。1295 次調査区と本調査地点の間でこの溝は途切れるものとみられる。L 55 － S D 25 は底面幅 20cm 程度の小規模な溝で，区画溝内部の空間を分けるといった性格が想定される。今回の調査では、Ⅰ期区画内でほとんど未調査だった南部台地縁辺の遺構分布状況を確認できたことに意義があったと言える。